

伊藤祐二  
(作曲家)ユージ 斧に  
気をつける

## ピアノ音楽の実験

「未来に受け継ぐピアノ音楽の実験」という、三年がかりのプロジェクトがスタートした。この一〇〇年間、音楽家はピアノ奏法にあくなき探求を続けてきた。例えばヘンリー・カウエルの「マノン」の潮流（1913）では、鍵盤を前腕で奏する。そのクラスタは、まさにアイルランドの神によって引き起こされた巨大な波の呻きだ。「バンシー」（1925）では、弦を直接指でこすり、引っかく。それは妖精バンシーの泣き声。ジョン・ケージの「季節外れのバレンタイン」（1944）、「ソナタとインターリュード」（1946-48）等の曲では、弦の間にボルトや木片等、様々なものを挟み込み、素晴らしく魅力的な響きを得る。しかし現在日本のホールで、これらの作品を演奏する事は極めて困難。許可が下りないのだ。ピアノが痛む（と言われている）から。プロジェクトは、この問題について、演奏家、作曲家（として私が参加）、音楽

学者、ホール管理者が同じテーブルにつき、様々なリサーチ、ワークシヨップ、コンサート、シンポジウム等を通して、結論を得ようというもの。（<http://www.monter.jp/EP>）

作曲家からの眺めは？

① 音楽家が目前の楽器の奏法を探索し、新しい音を得ようとするのはあまりにも当然なのだが……。さらに例えば、弦にボルトなどを挟み込むことによつて得られるその繊細で美しい音色。ピアノの「ピアノ」の「ピ」が、複数の微妙で不安定な倍音に分解している音素材は、調律され、安定したピッチ関係を前提とする近代西欧の作曲法では扱いきれない。つまり、弦に挟み込まれた一本のボルトが、その美しい響きと共に近代西欧の知を相対化する。これこそ芸術作品の存在意義なのでは？

② ナム・ジュン・パイクは、「ジョン・ケージに捧げる」（1959）の上演で、ピアノを破壊した。「エレクトロニック・テレビジョン」（1963）でも、上演時、ヨゼフ・ボイスがピアノを斧で破壊した。新しい音を得るといふよりは、コンセプトチュア的な側面が強いと思われるが、こうした表現は？

③ ミラン・クンデラの「パニユルジュがひとを笑わせなくなる日」は、有名なラシュディ事件を扱ったものだ。彼は「小説」という文学形式を、ヨーロッパ近代のもの、と規定した上で、シオランを援用し、ヨーロッパ社会を「小説の社会」ヨーロッパ人を「小説の息子」とする。

その、小説という領域は「道徳的な判断が中断される領域」であり、それは不道徳な事では無く、それこそが小説の道徳だと言う。ただちに人を裁く、理解せずに裁く、そういう人間の抜きがたい慣行に対する道徳であると。道徳に意義を申し立てるのではなく、道徳的判断を小説の外に追い出すのだ。

クンデラは、ラシュディ事件の中で、そういう「小説」という近代の文学形式と、それを生み出した「近代ヨーロッパ人」を擁護するのか、しないのかと問う。でも、クンデラの文章の調子はかなり苦しく、状況の中で、それが擁護されず、捨てられそうで、君たちはこれを捨てていいの、と訴えているようだ。

美術作品の中に政治的主張が見えるという理由で、美術館自身がその作品を撤去してしまう我が国で、私たちは何を擁護するのか？ しないのか？